慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Robert J. Smith, "Kurusu : the price of progress in a Japanese village 1951-1975"
Sub Title	
Author	高山, 隆三
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1979
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.72, No.1 (1979. 2) ,p.102- 105
JaLC DOI	10.14991/001.19790201-0102
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19790201-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Robert J. Smith

"Kurusu-The Price of Progress in a Japanese Village 1951-1975"

1

農地改革以降，日本経済の高度成長を経過して，日本の村落の構造，村落生活はいかに戦前のそれとは変化したものになったか，すなわち"むら"は変質あるいは崩壊したのか，変質したとすれば，それはどのような性格，構造からどのようなそれに変わったのかという問題について，農村社会学，農業経済学，法社会学の各側面から多くの研究が果たされてきた。その研究の過程において，1950年代では「共同体」の理論的検討に重点が置かれ，1960年代以降には，農地改革後の農民的土地所有の性格規定を基礎として，農民層分解の形態と性格が資本の強蓄積との関連で検討されてきた。このことは村落に関する研究において"むら"の解体を推進する原動力を明らかにする課題でもあった。高度成長下の農民層分解の進行，兼業の広汎な広がりの中で，村落の変化は都市化という側面から研究され，また村落の構成要素である"いえ"及び"いえ"と"いえ"の関係がいかに変貌したか，また家族関係の変化についての研究もすすめられてきた。

多面にわたる"むら"に関する戦後の調査，研究の中で，Robert J. Smith「Kurusu — The Price of Progress in a Japanese Village 1951-1975」は，戦争直後の香川県の一村落が四分の一世紀を経た現在どのように変化したかを比較検討し，変化の全貌を明確に呈示したという意味で注目すべき著作である。農地改革後の村落の現在にいたるまでの変化について，農業構造であるか，家族形態であるか，"むら"の共同体的関係であるか，一側面からの研究は枚挙にいとまないにせよ，その全姿態の変化を解き明かした研究はなかったといってもよいであろう。

著者の Robert J. Smith は，現在コーネル大学人類学の教授であるが，1951～52年にミシガン大学日本研究センターの助手であったとき，Social Science Reserch Council の奨励金を受けて来日し，香川県香川郡塩江町の一村落（当時は安原村に属していた）Kurusuの調査を行なった。その成果は1953年"Kurusu; A Changing Japanese Agricultural Community"というドクター論文にまとめられ，その一部がミシガン大学の Occasional Papers Number 5 に掲載された。その他日本関係の論文，著書は次のようである。

R. J. Smith and E. P. Reyes; Community Interrelation with the Outside world; The Case of a Japanese Agricultural Community, American Anthropologist 59(3), 1957.

R. J. Smith; The Japanese Rural Community; Norms, Sanctions and Ostracism. American Anthropolgist 63(3), 1961.

————; Ancestor Worship in Contemporary Japan. Stanford University Press. 1974.

————; A Japanese Community and Its Anthropologist, 1951-1975. Journal of Japanese Studies 2 (2) 1976.

2

スミス教授は1951年の来日以来，数度にわたり来日しクルスを訪れているが，1975年夏には三週間，クルスを再調査し，そして本書がまとめられたのである。

先ず本書の構成を示せば以下のようである。

前書　R. P. ドーア
序
1章　塩江町
2章　クルスの人口と家族
3章　農業の衰退
4章　生計
5章　内的世界の変化
6章　世代
7章　コミューニティとしての村落
8章　村落の結束の衰微
あとがき

広汎，多岐にわたって詳細にクルスという村落の変化を検討した本書を，全般にわたって紹介することは困難であるが，ここでは，著者がその解明に努力を注いでいる村落の結合の衰微を中心として著者の考えを明らかにしたい。

スミス教授はその序において，25年間における変化の概要を述べている。25年前に写真に収めた農機具，役牛は姿を消し，その当時には見られなかった自家用車，冷蔵庫，テレビが現在あり，建物の多くが新しくなっている。本州から四国に渡る連絡船からの景色は大きく変わり，瀬戸内海は死に近づき始めている。生

活は消費的志向をかきたてる生産の犠牲となっているように見える。しかしクルスの住民は25年前に戻りたいと思わないし，なお物質的進歩を追い求めると著者はみている。

第1章では，塩江町の概要と変化が，世帯数，人口，公営住宅建設，学校教育，社会福祉，リクリエーション施設等にわたって述べられ，第2章では，クルスの人口構成，家族構成について1951年と75年とを対比する。塩江町は過疎地域であり，人口は25年にほゞ半減しているが，ルクスでは人口数は20%に減少にとゞまり世帯数は22から23戸へと1戸増加をみている。しかし，一世帯当り家族数は減少している。このような人口減少率の差は，農業構造，労働市場との関連の中で明らかにされる。本章では，さらにクルスの5家族について，家族構成がいかに変化したかを事例的に示すことによって，クルスを取り巻く条件とその家族の対応を描き出している。

第3章では，日本全体の農業構造及び香川県並びに塩江町の農業構造の概況を述べ，そのうえでクルスにおける土地所有の変化，農業機械化の状況を検討する。平均40アールという零細農業であるクルスにおいて，機械化が進展する。しかし土地移動は少なく，零細経営が維持される。とはいえ機械化の進展は，農家間のゆい，手間替の関係を消滅させ，農業労働が主婦，老人によって担われるという変化を正確に記述する。

第4章では生計維持手段として，先ず農業収入について，米，商品作物をとりあげ，それが低収入であるにも拘らず農地が手放されない理由を，土地の資産化に求める。その他の生計維持手段として他産業従事の状況を職種，就業地，さらに町にある工場の概要が示される。そして，農業機械化と労働市場の発展が日常の生活を変化させる大きな要因であることを述べた上で，その生活がいかに変化したかの検討に移る。

3

第5章「内的世界の変化」ではクルスの人々の生活に生じた質的変化を検討することを目的としている。こゝでは家屋，家具・調度品，結婚した子供との暮し方，衣服と食生活，交通手段から，各種行事，習俗にわたって四分の一世紀の変化が具体的に取り上げられている。この変化についてスミス教授は次のように言っている。「アメリカ中西部の小さな農村に1951年に住んだことのある日本人の人類学者」が今日，其処を見た驚きよりも，私がクルスで見た驚きのほうが大きいのではないか。それはありえないほどのものだ。しかし，それば確かなことだ……」そして教授は続いて，次のように述べている。アメリカの農村も変化している。しかし，何が，どれほど変化したかについて我々は忘れている。多分それは，我々自身の社会の変化について絶えず身をもって経験しているからであると。この章を読む時，戦後生活を過ごしてきた日本人は，この25年間の生活上の大きな変化を，今さらのように思い起すに違いない。まさに経験してきたがゆえに忘れられている生活の変化の大きさが，経験しないスミス教授によって25年前と現在という形で明確に示されるのである。藁ぶき屋根の家は消え，家具，調度品には洋服だんすを始め，ピアノを持つ世帯まであり，日常の衣服は洋服となり，食生活では米の消費が大きく減少する一方，昔はお客にのみ供したような食事が日常化し，葬式の形式も火葬場が作られたことと参列者に多くの時間を費やさせることのないように，初七日の行事は葬式の日に行なわれるというように変化する。また命日の行事についても，その当日ではなく，当日に近い日曜日にそれが行なわれるという変化が生じている。

このような生活上の変化が，家族間，あるいは世代間にどのような較差，断絶を生ずることになるかを，次章でスミス教授は検討する。

第6章においてスミス教授は二宮金次郎の像に代って，男女児童の二人三脚の像が校庭に設置されるようになったことに世代間の思想，倫理，行動様式の隔絶を象徴的に見出し，その較差を豊富な事例を以て描き出している。学校では生徒を罰することがなく，生徒を喜ばそうとするようになり，子供は利己的になり，集団の中でどう振る舞うべきかを知らなくなっていることを学校の先生の口をかりて述べている。

スミス夫妻は1975年の夏の或る日曜日の午後，63歳のおばあさんが家の傍の野菜畠で働いているのに，息子と妻とその子供は，家の中でテレビを見ている風景を目撃する。また他の日曜日の午後，或る家を訪れたとき，71歳の当主のみが家に居り，妻は息子夫婦と共に自家用車で近隣の寺の見物に出かけ，当主が冷たい飲物を用意してくれる場面に遭遇する。このように当主が茶菓を客に自ら供するということは，正月以外にはなかった光景であり，さらに当主のみを残して家の人々が物見遊山に出かけるということは，以前には考えられないことであった。そこに家族関係及び世代の大きな変化と老人問題を鋭くスミス教授は見出してい

るのである。

4

第7章では，それまでの農業上，生活上の大きな変化を前提として，コミュニティとしての村落にどのような変化が生じたかを検討している。1951年には農業村落は日本の社会組織の基礎的構築物と見なされていた。村落はとりわけ，機能している協同的実在であり，それは少なくとも地域的統合の強い観念に基づいたものであり，また，実態的か観念的であるかを問わず，血縁関係を基礎にして構成された実在である。1951年にはクルスにもさまざまな共同作業と家相互の共同労働があった。しかし，1951年においてもむらの共同活動はその数においても減少し，むらの行事も簡素化されてきていたことを，スミス教授は指摘している。このような村落の統合がどの程度1951年に比して解体したかを，村落の各種の組織の検討を通じてスミス教授は明らかにする。

村落の自治組織であり，新しいいえ，村落構成員としての認定，葬式，結婚，誕生，村落の祭り，道造り，鎮守の八幡神社の秋祭りを取りしきる「同行」は「自治会」に改組され，その構成員は対等となり，自治会長も持ち回りにかわった。葬式も，火葬場が出来，葬儀屋にまかせる傾向が強まり，結婚式も自宅であげることは少なくなり，近隣の結婚式場が利用され，道造りも町の土木事業となり，自治会の役割は減じた。八幡神社の10月14日の秋の大祭も，その日に近い日曜日に行なわれるようになり，さらに70年代初頭には帰郷者の多いお盆の8月14日に夏祭りが開催されるようになった。1951年に組織替えされて設立をみた用水組合は依然重要な組織であるが，用水路をコンクリートで構築したことから，除草作業も水路の補修の労働も軽減されるようになった。

このように村落結合が弱くなったのみではない。クルスでは，村落の協同的性格が永久に失われるような事件が発生している。スミス教授は第8章において，この事件を取り上げ，その分析を通じて，日本の村落の現在の性格の規定を試みている。その意味で，第8章「村落結束の衰微」は本書の要とみなされる章である。

1973年，クルスにブロイラーの処理工場の建設が計画される。それをめぐって，賛成，反対にクルスの住民は二分され，深い亀裂が生じたのである。この紛争は，村落外部でも反対者が建設阻止行動をとったことによって，村落外に知れ渡ることになった。環境汚染に対するこの抗議運動は成功を収めるのであるが，この結果，建設賛成者と反対者は顔を合わせても挨拶をかわすことのないほどの分裂状態を一年有余も続けることになり，その間自治会も多数派を占める反対者のみの集合となって事実上の機能を失ってしまう。このようにクルス村落は深い傷を負ったとしても，しかしスミス教授は，村落が依然として機能しているコミュニティであると云う。そこに生れ育ち，互いにすべてを知り合う人々によって構成される村落では，永久的な敵意が発展する余地がないものと，スミス教授は見ている。またスミス教授は，有用性がある限り，コミュニティは存続するという見方をとっている。そしてその有用は，具体的には村落が生活保障的機能を果たし，あるいは果たし得ると期待されるところに求められる。従って，村落内では「和」が重要な規範となる。「堅固なコミュニティにおいては，弱者でさえも比較的安全であるということが，老人の経験から示されており，安全であるという理由は擬似的な血縁関係の絆により支援を求めれば応じてくれる人々が，補ってくれるからである。隣人達が互いに対立し合った時，人は安全を感じるであろうか」（p. 245）そしてスミス教授は，日本村落の基本的性格として，村落構成員の平等的な関係を強調する。勿論，村落における支配・従属的関係を無視するのではない。しかし，村落では権力による結束だけではなく，平等主義が働いており，家柄，経済力による権力も，貧者の福祉を考慮して，責任感を以て行使するというドーア教授の見解（福武直著「日本の農村社会」英訳版，序文）をスミス教授もとっている。この生活者としての平等主義と村落内の和の規範は，村落内部の対立に対して妥協，不和の除去を要請することになる。村落の住民は分裂しても依然として住民であり，毎日のように顔を合わせ，結婚式，葬式には助け合い，農業者には用水組合がある。1975年の夏には妥協が進行している。このことからスミス教授は，コミュニティがその住民にとってなお引き続き有用であり，古い感情的な束縛の強さを示すものであるという結論を導くのである。すなわち，深い分裂が生じたという事実の中にコミュニティの根強さを見出したとも言い得るであろう。

× × ×

既述のように本著作は，戦争直後の日本の一農業村落を徹底的に調査し，その豊富な知見を基礎として25年後の現在の村落を捉え直すことによって，戦後日本

の一村落の変貌の全容を描き出し，それを通じて戦後日本の政治・経済に逆照明を当て，その変化を明らかにしたといういい点で大きな意義のある労作であり，そのような村落変化の実相の多側面からの総体としての把握という著者の研究方法は，細分化傾向が著しい現在日本の村落研究のあり方に一石を投じたものといえるであろう。

しかし，本書における村落変化の総合的把握を通じても，なお，著者自身，その変化を量的なものとみるのか，質的なものとみるのか，その論理的整理に就いては問題が残されており，特に「有用性」概念によってコミュニティとしての村落の存続を理論化することは，それがあまりにも抽象的概念であるがゆえに，村落の性格変化の意義を曖昧にするきらいがあることはいなめない。また日本村落の一つの性格を「平等主義」と「和」に求めるとしても，その「平等主義」，「和」を構成する村落構成員の所得稼得構造と日常の生活様式の大きな変化は，その「平等主義」あるいは「和」を変質させはしないか，さらに村落の生活扶助的社会保障の機能の減退と合わせて考えるとき，村落統合原理としての「和」のもつ意味は異ならざるを得ないであろう。かゝる問題が残るとしても，本書のもつ戦後日本村落の変貌，その進歩の代償を明らかにした意義は大きなものである。

〔Stanford University Press. 1978 本文 250頁〕

高　山　隆　三
（経済学部教授）

A. ディートン

『戦後イギリスにおける需要のモデルと計画』

（ケンブリッジ応用計量経済学研究叢書・第1巻）

T. S. バーカー編

『経済構造と政策』（同上・第2巻）

I

本書は，過去5年間のケンブリッジ成長プロジェクト（代表者R. ストーン）の研究報告書である。第2巻の内容について検討しつつ，第1巻にも言及することにしょう。『経済構造と政策』の執筆者は9人にわたっているが，論文集ではなく，モデルを総合的に把握できるよう構成されている。全体は，Ⅰ概観，Ⅱモデル：定式化と推定，Ⅲ応用：1980年のイギリス経済，と3部に分かれている。第Ⅰ部は，3章（モデル・プロジェクションおよび価格，モデルの概観，モデルの解法），第Ⅱ部は，8章（個人消費，投資，輸出，輸入，雇用，価格と利潤，所得と支出，企業利潤・配当および留保），第Ⅲ部は，5章（1980年のイギリス経済：標準ケース，代替的経済環境，代替的租税体系とその負担，予算政策・公共支出および国際収支，代替的経済政策）から成る。

本書の主要な目的は，1980年のイギリス経済を予測することではなく，経済構造を表わすモデルを記述し，モデルを構成する関係式を定式化し，構造パラメータを推定し，これらの関係式を今後どのように発展させ，どのように応用できるかを示すことにある。

II

このプロジェクトおよび用いられたモデルの特徴は次のように要約できよう。

(1) 4～6年先の経済計画のための中期モデルである。

(2) 多部門モデルである。

(3) 1980年の政策目標を設定し，それを達成すべき政策手段の値をモデルから求めている。

(4) 1980年のイギリス経済に対する代替的な構造と経済政策を示している。

分析のフレームワークとしてなぜ計量モデルがすぐれているかの議論（I. 1）も読者（特に観念的・非数量的・